

## 学びのつながり広がり

行田稔彦

### 1、いま、「子どもと教育」を考える

現代は、子育ても子育ちも困難な時代だといわれています。子どもたちの「育ちの悩み」は、どのような現象として表れているのでしょうか。私たちが日々感じている「気になる子」には、「他動な子」「仲間と結べない子」「不登校・登校しぶりの子」「苛立つ子」などがあります。自信がなく、必死に自分の存在を捜し求めているように見える子どもたちの姿です。

2003年3月20日の中教審答申（「教育基本法見直し答申」）は、現代の子どもを「価値観が揺らぎ自信喪失感や閉塞感が広がり」「倫理観や使命感の喪失が正義や公正、安全への信頼を失わせている」から、教育基本法を見直して、「新しい『公共』と「日本の伝統・文化・国を愛する心」を育てるとしています。果たして、そうでしょうか。この道は、ますます、子どもたちの自信喪失感や閉塞感が広がるばかりではないかと思えます。

いま、子どもの人間形成上最も重要な課題は、「人間関係の力」を回復することではないでしょうか。「人間関係の力」とは、他者との交わりの中で育つ、「自分の頭で考え自分で決定する力」「自尊感情」「他者と異なることは当然、違いがあるから面白い、ありのままの自分でいい...等々の見方考え方のできる力」です。そして、こうした自己認識と対になって育つ「他者と共感・共生する力」です。「自己決定する」「違いを理解しあう」「自分もまんざらではないと思う」「他者と共感する」力が育つ生活と学習を、どう学校・学級の中に作っていくのが、いま問われているのではないのでしょうか。

### 友だちと 戦争と平和 考えた

A子(6年)は、2学期を五・七・五であらわす課題にこたえて上のような句を書き、そのあとに次のような文章を添えています。

「ふりかえて思うこと」

2学期は秋祭りや学習旅行や伝える会とか、あと工作技術の宿題とか、いっぱいあってとっても大変だった。どれも最後までできなくていらいらしていた時、友だちが助けてくれた。人に頼ることってそんなになかったけど、本当にうれしかった。友達って大事なんだって2学期の間何回か思った。沖縄学習で学んだことは全て考え深いものだった。「人間が人間で無くなる」ということの意味や現代と戦争をくらべてかんがえと、「人間とは何か」までもやもやしているけど、わかってきた。この2学期、世界と身近でたくさんのことを学べた。とてもよかったと思います。

このA子の表現の中に、今を生きる子どもたちの願いが読み取れないのでしょうか。私は、二つの願いを読み取ることができます。一つは、「学ぶほどに友だちとの絆が強くなる学習」

をしたいという願いと、「学ぶことを通して自分が見え、他者が見え、自分と世界の関わりが見える学習」をしたいという願いです。

6年生の2学期はとても過密です。10月初めの「秋祭り」に向けて9月から、「エイサーの練習」、「祭りの遊びコーナー」、「沖縄の店」などの準備が続きます。祭りが終わると、10月末は沖縄学習旅行へ出発です。11月は、沖縄学習旅行をふりかえって学習を深め、一冊本やアルバムを仕上げ、12月に5年生と父母に伝える会を持ちます。さらに12月には、「歌の会」もあります。もちろん、教科の学習も手を抜くわけには行きません。A子の文は、そんな中で、「友だちって大事だ」と信頼を深めたことや、「人間」について深く考え、世界と身近なことを学べたことが、とても良かったことだと書いています。

春の校内研究会で、A子のいる学級の「子ども研究」をしました。「特に気になる子どもたち」として、「認識の幼さを感じる子」、「不登校気味の子2人」、「何かに苛立っている子」の状況が取り上げられました。「不登校気味の子ども背景」にも「苛立つ子の背景」にも、家庭や学校での子ども同士、子どもと親、子どもと教師の人間関係の屈折が見えてきました。

A子の学級では、「不登校気味の子」をめぐる話し合いをしているとき、「どうして学校にこなければならぬか」という話題になりました。子どもたちからいろいろな意見がでましたが、そのとき、先生は、「自分の生活を豊にするために学校ってあるんじゃないか」と語りました。

非常に重要な言葉だと思います。教育は教育活動の内容を通して子どもの人間関係力に迫るわけですから、私たちは、教育の質（教育内容・文化や方法）が子どもを通して検証されるようなスタンスをいつも持っていなければならないと考えます。子どもたち一人ひとりが、「自分が豊になった」という言葉を実感できる実践をつくる事が、私たちに求められているのです。

こんな課題意識をもった学級の取り組みの中でA子の「五・七・五の句とそれに添えた文章」が生まれたのです。私たちは、そこに、大きな意義を感じています。

## 2、人と人が切り裂かれる学校

学べば学ぶほど人間関係が切り裂かれる

今、子どもたちが求める学校は、「人と人が切り裂かれる学校」ではなく「人と人がつながる学校」です。しかし、現実の方向は、これと全く反対の方向に進んでいるように思います。

2001年1月、当時の遠山敦子文科相は『学びのすすめ』を出しました。それ以降、少人数習熟度別授業や朝読書などが全国の学校で強化されました。

2002年8月、文科省は「発展的な学習の展開」を示しました。習熟度別授業の中で、できる子には削減された教材を復活する展開例を示しました。

2003年12月26日、河村文部科学相は、学習指導要領にある「～は扱わないものとする」などの一部記述の改訂を告示しました。

2004年1月3日付朝日新聞は次のように報じています。

「台形の面積を求める公式や4けた同士の足し算など、小学校の算数教科書から削られ

た内容が、05年度から使用される教科書で「発展的内容」として復活する見通しになった。新しい教科書の検定作業は大詰めを迎えているが、教科書会社各社はこうした内容を盛り込み、検定合格をほぼ確実視している。文部科学省は発展的内容を全体の分量の1割程度まで認める方針だ。」教科書会社は「発展的内容」として、「台形の面積(5年)」「4桁のたし算(3年)」「帯分数の計算(6年)」「3桁×2桁(3年)」「拡大図と縮図(6年)」「億・兆を越える大きな位の数(4年)」などを検討しているようです。

私たちは、教材の質を問わない「3割削減」を批判してきました。2001年の「学びのすすめ」は、それに応えたものでなく、例えば、計算処理能力のような狭い意味での「基礎学力」を短い時間で早く習得させる「習熟」学習の流れを強化しました。遠山前文科相は「新学習指導要領がゆとりばかり強調され、『確かな学力』のねらいが不明確になっていたので『すすめ』を出した」のであって、政策転換ではないとしていました。

今回の「学習指導要領一部改定」もまた、どの子どもわかりたいという願いに応えているのではなく、いままでの延長線上の措置でしかないと見るのが大事でしょう。復活されるのは、全ての子どもたちへの指導内容ではなく、「発展的学習」の内容であり、教材論から来る復活内容でもありません。

文科省の立場は、すでに数年前に寺脇研氏が『論座』で、東京大学の刈屋氏に語っているように、「学力分業論」にあると思われます。学習指導要領は最低限の内容であり、できる子にはどんどん教えるべきだという考えです。学力フロンティアスクールの実施などはその典型ではないでしょうか。

今年は、全国の多くの先生方から、戸惑いと苦悩の声を聞く機会がたくさんありました。「ストップウォッチが全学級に配られた」、「少人数学級加配で学級が解体され担任が学級の子どもへの宿題などの課題を出せなくなった」、「教師の足並みをそろえるために、ますます自主的な教材作りがしにくくなった」、「教科書どおりの授業しかできにくくなった」、「学級が子どもたちの学びあう場ではなくなった」、「少人数加配担当になって、戸惑いの毎日だ」などです。

少人数習熟度授業であっても、子どもたちに差別感や疎外感が生まれないような努力がたくさんなされていることも聞きました。グループを固定化しないで教材の途中で「習熟度コース別」を取り入れる。「習熟度別コース」と「課題別コース」を単元の質に応じて工夫している。「コースを教師が振り分けるのではなく子どもに選ばせている。」

また、全校の少人数加配担当になった利点を生かして、全学年の教材を自主編成している先生もいます。しかし、こういう先生は極めて少数です。

こうした努力はなされていますが、それでも、「授業公開の時には『回復コース』や『習熟コース』の親子には笑顔が見られない」、「習熟コースを選んできたわが子に、今度は発展コースを選ばなさいと語りかける親」などの実態があるようです。

何よりも問題は、「クラスの中に生活体験の違いのある子、理解に違いのある子など、さまざまな子どもたちが一緒に学びあう中で、幅広い知識を獲得し、理解を深めていくような授業づくり」が困難になってきているということです。こうした状況は、まさに、「学ばば学ぶほど人間関係が切り裂かれる学校」になってしまっているといえないでしょうか。今大切なことは、学ばば学ぶほど他者との絆が深まる授業の創造です。

少人数授業に対して、子どもたちの中には好評な声もあるようです。それは、これまで

の一斉授業とは違う、個々の子どもの考えが生かされる授業になっているからではないでしょうか。授業の中で一人ひとりを生かした「わかる授業」をしてほしいという、子どもの願いとして受け止めるべきではないでしょうか。少人数習熟度別ではなく、学級定員を少人数にしていくことが、子どもの願いに応える道だと言えるのではないのでしょうか。

子どもだけでなく、親も地域も教師も

切り裂かれているのは子どもだけではなく、学校も教師もそうです。「学区域の自由化」や「人事考課制度」などがもたらす影響も心配です。「少人数加配に問題を感じつつも、それでも加配教員がほしくなるほどゆとりがなくなっている学校」、「加配をテコに少人数習熟度別授業の定着をねらう教育行政」、「区のホームページで学力テストの結果を公表することで激化する学校間競争」とりわけ東京では、校長がマネジメント方針というのを出して、それに一人ひとりの先生が、教科や行事の指導でどう貢献できるかを自己申告し、それがどれくらいできたかを年度末に評価され査定される「人事考課制度」が実施され、学校が教育の場では無く、経営の場にされてきています。

「学区域の自由化」は、各学校の教育効果を高めているのでしょうか。学区域を規制緩和することは、今までの硬直した制度に風穴を開ける意味でプラスの側面があるのかもしれませんが、しかし、父母の学校選びの視点は決して「教育の質」だけではないようです。「旧来の地域ブランド校志向」であったり、「親の手を煩わす学校であるかどうか」であったりする側面が強いようです。クラブ活動も成立しないほど児童生徒の人数が激減した学校は存亡の危機に立たされています。こうした中で、学校と地域のつながりや地域での父母のつながりが切り裂かれてきています。今大切なことは、地域につながる、地域を生かす学校教育づくりの中で、人間関係の力を育てることではないのでしょうか。

### 3、「実感のある学び」で「つながる知」を

「わかる」授業で「実感のある学び」を

「学びのすすめ」が浸透する中で、「総合的な時間」はもういいから、今度は「学力」という風潮が強まっています。それでは、ほんとうに教科研究が実践されているかというところではなく、「教科内容の削減と少人数習熟度別授業」が押し付けられ、生活体験や理解に違いのある子など、さまざまな子どもたちが一緒に学びあう中で、幅広い知識を獲得し、理解を深めていくような「わかる授業づくり」が困難になってきているのです。

「総合的な学習の時間」も、「学校の特色を生かす実践の創造」という言葉とはかけ離れてきていると感じさせられます。山極隆司氏は「総合の時間」は「英語と情報と習熟の時間にあてればそれでいい」と言うに等しいことを全国各地の講演会で話しています。

子どもの学びは子どもの中で『一つながり』です。教科教育と総合学習を対立してとらえるのではなく、相互の還流で「わかる授業」「実感のある学び」をつくっていくことが大切ではないのでしょうか。「わかる授業」とは、「覚えることではなく、なぜそうなるか考え」て、「バラバラに学んだ知識がつながって、『あっそうか』、『なるほど』と納得する」授業です。教科教育でも総合学習でも追及していきたいものです。

「実感のある学び」とは「つながる知」を育てること

...それは、これからの時代に生きる「新しい知」

和光鶴川小学校はここ数年「実感のある学び」を探求してきています。それは、バーチャルな情報化社会の中で、「学ぶ意味をつかめず」に、「つまらない、わからない、やくだたない」と、学ぶことに背を向けている子どもたちに、学校教育は正面から立ち向わなければならないと考えたからです。「実感のある学びとは、羅列した知を覚えることではなく、それを関連させ、生かし、発展させ、学ぶ主体である子どもの目標と結びつけた学び」であると考えています。キーワード化して、「つながる知」と言ってもいいと考えています。

教育を狭い意味での「学力」だけからとらえる風潮が強まる中で、「実感のある学び」の追及はますます重要だと考えています。狭い意味の「学力」偏重学校では、これからの時代を生きる子どもたちの人間形成上の課題に応えることはできません。今、必要なことは何でしょうか。それは、第1章のA子の学びで紹介したように、二つあると思います。一つは、人間形成と課題としての「人間関係の力」を育てることであり、もう一つは暗記した知識の切り売りでは通用しなくなっている時代に求められる「新しい知性」を育てることです。

「新しい知性」とは何でしょうか。それは、「実感のある学び」で育つ「自分が見え、他者が見え、自分と世界のかかわりが見える知性」です。つまり、「つながる知」です。私たちはこれまで、「知に血を通わせる」ことの大切さを言ってきました。知に血を通わせるとは、学んだことが子どもの血となり肉となるという意味です。学んだことが、子どもの周りの世界とのかかわり方を変える転換点となるような「知性」を育てたいということです。

こうした「血の通った知性」を育てる要素として、四つのことを挙げてきました。

五感を通して見る、聞く、考える学習体験を大切にす。この体験は、子どもの問いが生まれてくるような本物体験を組織していく。本物体験とは、子ども自身の、もの・コト・人とのかかわりの事実が見えてくる体験である。

その中で問いを育て、問いを仲間の中で解明する学習活動を展開する。

子どもが学び考えたことを表現し、伝える学習を大切にす。その中で、子どもは学習対象をいっそう深くとらえ直し、自分自身もとらえ直す。伝える学習は子どもの意見表明である。

こうした学習の中で、子どもの自分探しを応援していく。

この四つの要素は、「つながる知」を育てる要素と言い換えてもいいと考えています。

昨年の公開研では「実感のある学び」と「学びのつながりと広がり」を考えました。それは、総合学習でも教科学習でも、学年や教科領域の分野を相互につなげて考える必要があるのではないかと考えたからです。「自然と関わる分野」「食に関わる分野」「数と量に関わる分野」を考えました。

今年は、さらに、「学びのつながりと広がり」を、学校教育の教育課程を視野に入れて考えました。学習対象の「つながりと広がり」だけでなく、「一人の人間としての、学びのつながりと広がり」や「自分と他者をつながる、学びのつながり広がり」「自分と世界のつながる、学びのつながりと広がり」を検討しました。「学びのつながりと広がり」の研究は、「つながる知」を探求することだといってもいいでしょう。

和光鶴川小学校では どんな子どもが育つか

「和光鶴川小学校では、どんな子どもが育つか」と問われるようになりました。開校12年経ったのですから、そのような問いをもたれるのも当然なことです。しかし、和光鶴川小学校を卒業した子どもはすでに450人もいて、それぞれに個性的なのですから、一般化

することはできません。ただ、身近にいて、「こんな頼もしい18歳になるんだ」と思わせる開校初年度1年生の姿を語る材料はいっぱいあります。私は、具体的な卒業生の姿を通して、「和光鶴川小学校で育つ子ども」を語ることにしています。

A子は和光高校生徒会長を務めています。新入生を迎える言葉は圧巻でした。「私は、何の意味もわからないで和光鶴川小学校に入学させられました。私は、いま、和光に入れてくれた親に感謝しています。小学校では、学ぶことをたくさん経験しました。実際にものを作ったり考えたりしました。中学校では、自治とは何かをたくさん考えさせられました。和光という学校は、自分の考えをもって学ぶところです。それができる学校です。そのためにも、自分の目的を持つことです。自分なりの考えや目的をもてるかどうか和光生活を突きのあるものにするかどうかにかかっています。みなさんの中には、研究したい人、文化や芸術方面に行きたい人、スポーツに打ち込みたい人など、さまざまだと思います。高校生活の中で、それを見つけてください。」

教師以上に、「和光の教育」を語る力を持っていると思われました。

B夫は和光学園70年誌の「これからの和光...生きるみち」の幼・小・中・高校教師と高校生代表の座談会に出席しました。公立中学校から和光高校に進学した生徒の、「和光は、ものごとに対してあなたは どう思うかを問う授業ですごいと思った」という発言を受けて、次のように語りました。「今言ったような授業で意見を書くことは、私は小学校の時からありましたから、普通だなと思っていましたが、学ぶことが本当に楽しくなるんです。特に小学校の時から総合学習というのがあって、自分でテーマを選んで、調べて現地を訪れてみて人の話を聞いたり、そこから学び取っていくという、まさに自主性があふれているところだと思います。私が和光高校へ進学したのは、そのよさに惹かれたからです。」

A子、B夫だけではない。親和会(PTA)広報誌が企画した「第1期生の和光鶴小を語る座談会」に参加した10名近くの卒業生が共通に語ったことは、小学校時代に学んだことは「覚えることと考えることの違い、学ぶことの面白さだった」ということです。

彼らは、今、18歳です。「自分の考えをもつこと」「覚えるよりも考えること」「目的をもって挑戦すること」などの言葉を卒業生自身の口から聞かされることは、まさに教師冥利に尽きる思いです。和光鶴川小学校で育った子どもたちのたくましさや明るさに励まされています。私たちは、「切り裂かれる教育」ではなく「つながる教育」の中で人間が育つということを実感しています。

#### 4、「学びのつながりと広がり」をつくるには

前章で、「知に血を通わせる=つながる知」を育てる4つの要素を書きました。「学びのつながりと広がり」をつくるにはどうしたらよいのでしょうか。ここでは、今年の研究から見えてきていることを書くことにします。

##### (1)教師自身が「つながり学ぶ」こと

「学びのつながりと広がり」の研究は、「学ぶ意味を実感できる授業づくり」への挑戦です。公立学校の厳しい中であって、果敢に挑戦している先生を何人も知っています。和光鶴小の研究は、「学ぶ実感」をつくる、全国の先生方とつながって進んでいます。当たり前

のことで、まず、教師自身が、学びのつながりと広がりをもつことが大切だと考えています。

私たちは、「学ぶ意味を実感できる授業づくり」の実践に学ぶことができました。今年、夏の校内研究会では、埼玉県公立小学校のY先生の実践に学びました。Y先生は「目の前にいる子どもの生活や現実から出発し、子どもたちの心の声を聴きながら何にこだわり、つまずき、瞳を輝かせるのかを知ることは学習づくりの出発点です。さらに、公式に当てはめて問題を解くことや、早く計算ができることよりも、なぜそうなるのかと考え思考する力を大切に算数学習をつくるのが重要です。」と語りました。

鶴小では、教科や総合学習で「たんけん隊」学習に取り組みます。それは、「少年少女期の教育課題」をテーマに研究していた時、3年生で「はひふへほ たんけん隊」という典型実践（『学校ってすてたもんじゃない』参照）が作られたことによります。その背景には北海道のH先生の「ほう そうか 探偵団」実践を学ぶ機会がありました。H先生は、次のように書いています。

「学びはすべて総合的である。学ぶ過程で蓄積されたバラバラなことがある日つなげると『ほう！そうか』『わかった！』と実感できる。考えることはつなげることである。わたしたちは子どもを学びの主体に育てたいと考えているが、決して子どもに任せているのではない。『ほう！そうか』と『わかる』過程に、教師と学校がしっかりとすわってほしい。」

さらに、校内研究会でも、お互いに学びをつなげる努力を重ねています。各人に、1年間に最低1回の授業研究、ないしレポーターの機会があたります。研究会の準備はチーム別に行われ、研究会が終わると、すべての先生が学んだことの感想メモが、研究部ニュースとして配布されます。

以上のことをまとめると以下ようになります。

- 子どもたちの生活現実とつながること
- 子どもと子どもをつなぎ、なぜそうなるか考える授業を大切にすること
- 子どもと文化をつなぎ、“ほう、そうか”とわかる過程に教師が位置づくこと
- 教師同士、共同研究者とのつながり、実践の質を高めること

## （2）五感を大切に「モノ・コト・人と豊につながる本物志向の授業づくり」

...モノ・コト・人と子どもをつなぐ...

子どもは、「実感のある生活」の中で「実感のある学び」を獲得します。五感を大切に「モノ・コト・人と豊につながる本物志向の授業づくり」は、今日のバーチャル社会にあっては、より重視されなければならない視点ではないでしょうか。

ザリガニとウシガエル...ウシガエルのすばやい捕食に唖然

1年生生活べんきょうの「あさのはっぴょう」では4月早々から生き物の「はっぴょう」が続き、6月の遠足は町田市内の小山田緑地へザリガニ釣りに出かけました。たくさんザリガニが釣れ、大きなウシガエルも捕獲した。その後、北山学級では「何を食べるかを調べ」「ザリガニカードに絵を書き」「ザリガニつかみに挑戦」しました。ザリガニの背をしっかりとつかんでもてるようになると、背中とハサミが堂々とした絵をかけるようになりました。体験と認識が連動していることがわかります。ウシガエルの餌はザリガニだということがわかると、1年生の教室では、飼っているザリガニをウシガエルの餌にし

てよいかどうか真剣に討論が始まりました。とうとうウシガエルにザリガニを餌として食べさせる日がきました。ウシガエルの水槽に入れたザリガニを、まるで吸い込むように口の中に入れるウシガエルのすばやさには1年生はびっくりしました。動物の体、捕食、いのちを感じるとる原初的体験といってもいいのではないのでしょうか。生き物が、子どもの学びをつなげ、子どもと子どもをつないでいるのでいます。

バッタ捕りの狩人...先生も子どもも一緒になってファープルの追体験

2年生生活べんきょう「秋の虫」もまた、自然と子どもをつないでいます。ファープルは昆虫記の中で「バッタとりは私のような年寄りにも小さい子どもにもできる楽しい“狩”です。」と書いています。下鳥先生は子どもたちといっしょに、ファープルの世界を追体験しました。子どもといっしょに、バッタ捕りの狩人になったのです。捕まえた虫の種類は18種類だった書いていますが、昆虫図鑑を手に子どもといっしょに調べる先生の入込みみようが伝わってきます。さらに、教師は「鳴く虫を捕まえよう」と呼びかけ、教師自身も挑戦しました。ここに教師の指導性があると思います。

捕ってきた虫を教室で飼いました。飼うとますます面白くなりました。「すみかやえさを試して飼える」「食う・食われる関係が見れる」「交尾が見れる」「産卵が見れる」「脱皮が見れる」「鳴く声いろいろある」などたくさんの「驚き」と「発見」がありました。

子どもたちの「学びのつながりと広がり」が、父母の「学び」へとつながり広がりました。クラスのお母さんからの連絡ノートから読み取ることができます。

「1年生のころは何かと緊張し、『どうしよう』と泣きついてきた子どもも、今では毎日をとて楽しんでるようです。学級通信を通して、授業内容やクラスの様子がわかるのは大変ありがたいと思っています。『虫』の学習では、わが子が、そして、私が、こんなに虫に興味を持つとは思いませんでした。ファープルのおっしゃる通り、確かにバッタ捕りは面白いものですね。子どもだけでなく、私も草むらを見つけると、ついしゃがんで虫を探すのが癖になってしまいました。(略)『虫』にしる、『パン』にしる、『せかいちず絵本』にしる、“2年生はこれくらい知っておけば充分”というような枠を決めてしまいがちですが、深く学習することによって、子どもの『なぜ』『どうして』という気持ちがみたされるのだということがわかりました。“子どもがおもしろい授業は大人にとっても面白い”と毎度のことながら、思いました。」

「今日は校門の外で捕まえた虫が“クツワムシ”しかも、オスと聞き大満足です。『秋の虫』では、わが子以上に草むらが気になるようになり、絶対に鳴く虫を捕まえない...鳴いている夜に草むらに行けばつかまえられると思い、出かけたものつかまえられずガッカリだったので、今回のオスのクツワムシで、やっと『秋の虫』が終わりという感じです。」

ひとりのお母さんが語った「深く学習することによって、子どもの『なぜ・どうして』が満たされるのだということがわかりました」ということは、「学びのつながりと広がり」の重要なポイントです。

(3)「子どもと子ども」、「子どもと大人」をつなぐ

...「問い」、「発表の時間」、「討論」、「一冊本」、「伝える会」

「発表の時間」は「つながる教育」・「つながる知」の出発

和光鶴川小学校では、入学式の翌日から「発表の時間」がもたれ、子どもたちは見つけたこと、知らせたいことを発表しています。ヨモギ、ノビル、竹の子...などの『春を食べる』生活べんきょうは「発表の時間とつながって展開されています。「発表の時間」は、学校生活の中で、子どもと子どもをつなぐととも大切な時間になっています。現在は低学年の取り組みですが、この課題は、高学年にもつながる課題だと考えています。その意義を考えてみました。「つながる教育」「つながる知」の出発です。

自分の興味関心自体に価値があるという見方を育てる...子どもは、毎日の生活の中で、身のまわりのモノ・コト・人と関わり、「見つけ、とらえ、行動し、判断し、自ら分別の力を育てています。「どんどん発表できる子と、なかなかできない子がいるのを、どうしていますか」と問われることがあります。私たちは、子どもを横並びにとらえるのではなく、回数が多い子も少ない子も、「発表の一言の裏には、たくさんの思いが詰まっている」ととらえることが大切だと考えています。子どもは発表の時間を重ねる中で、ものを見る感性や発表の力を徐々につけていきます。

お互いの興味関心に価値があるという見方を育てる...友だちの発表を聞いて、「ぼくもやってみたい、調べてみたい」と、その世界に新たな興味をもつ子が出てきます。また、「あの子はこんなところはすてきだ」という見方も育っていきます。友だちの興味関心に共感したり、興味関心を共有する時間になります。そんな、相互の関係がつくられる中で「自分の居場所」を感じとることができるようになります。個別の興味をつないだ共同の学習の楽しさを味わうことができる...「発表から学習へ」と、共同の課題が立ち上がります。今年のレポートでも、『ザリガニとウシガエル』『ジャムづくり』『秋の虫』など、個々の興味が共通の学習課題となって進んでいることを読み取ることができます。

#### 子どもたちが解き明かしたい問い...討論のある授業を

学べば学ばほど友だちとの絆が深まる授業づくりは、子どもの問いを育て、子どもの問いを子どもに返し、子どもの考えをつなぎながら解明していく「討論のある授業」作りです。これは全ての授業で追求されるべき課題です。

3年生の社会科の「地図を読み解く」授業がありました。地図上の記号を予想し、解明していく授業でした。子どもたちは、畑、田んぼ、などを解いていきました。ぐにゃぐにゃとまがった線（等高線）は山と読み解きが進むうちに、等高線のへこみに向かってのびる一本の線が話題になりました。子どもは、その線の周りに田んぼがあることから川ではないかと読み解いていきました。子どもの考えがつながる授業は実に楽しいものでした。

「子どもたちの人間関係の屈折があるので学びあいの雰囲気つくれない」という場合があります。しかし、子どもの関係を変えなければ討論のある授業ができないのかということ、そうとばかりはいえません。むしろ、子どもたちが解き明かしたいと思う授業を進める中で、子どもの関係性を変える筋道もあります。子どもと子どもをつなぐ授業づくりは、後者の道筋に挑戦する道です。下鳥学級の連絡帳に「深い学習は、子どもの『なぜ・どうして』を満足させる」という親の言葉がありましたが、この言葉の中に、「子どもと子どもの学びをつなぐ」ヒントがあるのではないのでしょうか。

学んだことを表現することは、新たな問いの始まり...問いの螺旋的發展を  
和光鶴小では、多様な「一冊本」作りに取り組んできました。「俳句の本」「疑問集」

教科や総合学習の「調べ学習」をまとめた本、など多様です。それぞれに、意義があります。今年は、「学習をまとめる」ための冊子作りではなく、「学習を形成する」ための冊子作りを大切にしました。

2年生の、「ジャムづくり」の一冊本の製作過程の授業を検討しました。子どもたちは、パイナップル、梅、ラズベリー、ブルーベリー、あんず、さくらんぼ、のグループに分かれていました。それぞれの果物によって、「つくる仕事」や「かかる時間」が違います。この授業では、一冊本の交流を通して、その本づくりの良さや共通点を探すとともに、果物による違いや共通点に気づくことをねらいました。「始めと終わり、経過や変化、個性的な気づき、表現が盛り込まれている」ことを大切にしたい一冊本を使った授業でした。

6年生は、沖縄学習旅行から帰って真っ先に証言者から聞いた話をもとに「心に残った一言」(一冊本)に取り組みます。このねらいは、話しの内容を振りかえる、メッセージを振りかえる、絵や文で表現する、交流し合う(伝える)、にしています。

学級では、「心に残った一言」の中から、みんなで深めるテーマを取り出して、さらに深める討論を進めました。「人間が人間でなくなる」を書いた子が一番多くいました。一人ひとりの「人間が人間でなくなる」観を交流しました。「人間の常識がなくなる」「限界をこえている気持ち」「感情がなくなる」「わけがわからなくなる」などが出されました。

討論の終わりに、一人ひとりの感想を書いてもらおうと、友だちの意見につなげた意見が書かれました。「限界をこえてしまうというのに賛成。感情が抑えられなくなって自分でどうすればいいのかわからなくなる。」「やっぱり感情がなくなるということにつながると思う。それはとても恐ろしいことだと思う。人はたった一つしか命がないから、そのたった一つのいのちをそんなことで無駄にしちゃいけないと思う。」「こういった話し合いをしていると、いろいろな考えが聞けて面白いっていうかいいと思う。あまねがいった感情がなくなるって意見に共通していると思う。」

教師は、次の日、感想を読み聞かせながら、さらに、「自分のまわりやクラスにはないか」と聞いてみた。ないという子がほとんどで、あるという人が二人いました。「ゲームとかで死ぬ死ぬとか言いながらやっている人がいるでしょう。ああいうのは近いと思う。」すると、もうひとり増えました。「一学期、けんじとけんかしたじゃん。なぐりあいとかしているとき何も考えられない状態で何するかわからないとか、そのときは人間が人間でなくなるに近いかも...」

その日は、感想を生活ノートに綴ることにしました。意見の対立がありました。「本来人間が持っている感情どおりに人とかがかわることができなくなった時だと思う。私はこのクラスの人が人を殺すって言うまでではないけど、時たま本来の人間の考えと違ってしまっていることはないとはいえない。ゲームに向かってではなく、他人に向かって「ざけんな、死ぬ」って言ってる人がいる。...」「けんかした時は、感情があると思う。何も考えずになくれるはずがない。人間が人間でなくなるというのは、おれの基準では感情がなくなることだから、このクラスではないとおもう。」(人間が人間でなくなる = 感情がなくなる、ととらえている)

子どもたちの討論は、その後、さらに続けました。人間の感情がなくなることと、本来の人間らしい感情がなくなることは違います。そうすると、「本来の人間とは何か」を考えて「人間の基準がわからなくなった」という子も出てきました。

このプロセスから子どもの学びを「つなげ・広げる」中で、一人ひとりの学びが「深まる」ことがわかります。子どもがつくる一冊本やレポートなどの学習表現は、それが「子どもたちがつくる学習材」になることによっていっそうその価値が高まるのです。

「伝えること」は、学び直しであり、意見表明すること

和光鶴小では、「伝える会」はいろんな機会に取り組まれています。「川の学習を伝える会」「食の学習を伝える会」「沖縄を伝える会」などのほかに、「民舞を伝える会」などがあります。子どもから子どもへ、子どもから親へと伝える学習を大切にしています。

6年生は、『沖縄学習旅行・学習アルバム』（学習旅行の4日間を写真やパンフレットなどを織り交ぜてビジュアルにまとめる一冊本）をつくり、「5年生と親に伝える会」をひらきました。

「沖縄の服装と音楽」のグループはみんなエイサーの衣装で登場して報告した。服装は「エイサーの衣装」「雑踊りの衣装」「古典女踊りの衣装」「若衆踊りの衣装」を模造紙に書いた絵で説明しました。二人の子どもがサンシンを弾き、グループみんなでエイサーを踊った後、沖縄に古くから伝わる歌「ていーちでいーびる」サンシン伴奏で「安里屋ユンタ」を歌いました。歌あり、踊りあり、レポートありの報告で、グループ報告の質の高さに驚かされました。

5年生は6年生から渡された「沖縄学習ノート」に最初の自分自身の言葉を書きました。

「Sさんの話を聞いて...沖縄の戦争について教えてもらった。Sさんはガマに入って、とても暗かったと言っていた。目をあけても閉じても同じくらいなんてあるのだろうか。戦争では自分の親を殺す人もいたみたいだ。親を殺してなんになるのだろうか。“戦争中はみんな生きることがこわかった。”それはどういう意味だろう。そして、戦争が終わってから『命が大切なんだ』と気づいたそう。沖縄ではつらいこともあるけど、楽しいこともたくさんあると言っていた。写真でグラスポートからとった海の中を見せてもらった。魚がいっぱい泳いでいてとてもきれいだった。色がきれいなものもいたし、大きいのもいた。日本にはこんなに魚がいるんだあーと思った。本当にきれいだった。」

また、父母は、しっかり伝える子どもの姿に感激し、子どもの真剣な姿に励まされた、また、働く意欲が出てきたという声が寄せられました。

#### （4）教科教育と総合学習を「還流」させること

教科教育と総合学習には、それぞれに独自のねらいと内容・課題があります。総合学習は方法概念ではなく目的概念です。身のまわりに生起する出来事から学習を始めて、社会が抱える今日的な問題を主体的に考える、能動的な学習者（生活者）を育てることを目的にしています。それぞれの学習がある部分を受け持って学習目標にせまる合科教育的な学習との違いを明確すべきだと考えています。

ところで、違いを明確にすることは、両者を分離することではありません。逆に、教科学習が総合学習の質を高めたり、総合学習が教科学習の興味を高めたりするなど、それぞれが還流して教育効果をあげることをねらっているのです。今年は、その「つながりと広がり」の探求を意識的に追求してきました。

「地域の生活現実」が教科教育と総合学習をつなぐ

4年生は、鶴見川、真光寺川を対象に総合学習に取り組めます。4年生の年間カリキュ

ラムには「川は生きている(国語)」「くらしと水(社会)」「地形と川(理科)」があります。総合学習「鶴見川(真光寺川)」の授業計画は、こうした教科教育の授業計画と直接リンクしていませんが、あるときつなげてみると「そうか!」「わかった」と実感できることがあります。

総合学習「真光寺川」のグループ研究は、「伝える会」が近づいてきました。伝える会に向けた研究グループには、魚や鳥だけでなく、源流、下水、今と昔の川をテーマにする子どもたちのグループができました。川の学習を通して、里山の自然と地域での暮らしのつながりを考える問題意識が芽生えてきたのです。地域深検を重ねた成果といえるでしょう。

社会科の「水とくらし」の学習では「浄水」「下水」について学習します。言葉だけの教えでは、ダム、川、浄水場、給水場、家という水のつながりを認識できない子もいます。「大きな小河内ダムにどのように水がたまるのか」と、疑問をもつ子がいます。4年生は多摩川の源流域の山梨県丹波山村で夏合宿しているのですが、「多分だけど、降った雨が、俺たちが遊んだ川とかに流れこんで...あれってダムまで行っているのだろうか」と夏合宿の体験が土台になって、山の水がダムにつながるしくみが見えてきます。「水源林を整備すること」「豊かな水」のつながりが見えてくるようになります。

下水の学習で、排水や雨水の流れを調べていた時、道路に比べて雑木林から流れ込むマスにはちょろちょろとしか流れていないことが話題になった時、『川は生きている』に書いてあったじゃないかと、子ども自身が国語の学習につなげて会話するようになります。

総合学習で「真光寺川の今と昔」を調べているうちに、河川改修の時に残された「昔の川」が埋められないで、小川の筋のようになって、そのまま残っていることがわかりました。また、真光寺川に沿って歩いているうちに、極端に川が汚れている場所がありました。社会科の学習で「下水」を追っている中で、「昔の真光寺川」と「今の真光寺川」の合流点あたりが汚れているのではないかと学習課題が焦点になりました。昔の真光寺川に下水が垂れ流しになっていないかが疑問になってきました。社会科で下水管の配管図を資料にした「水をくらし」の授業がもたれるようになりました。

「川の学習」「水の学習」は地域の人々の活動ともつながって展開しています。町田市下水道局の呼びかけに応じて、「真光寺川源流域改修工事にむけての子どもたちの声」を届けました。「NPO・TR ネット主催の鶴見川フォーラム」で子どもたちが報告しました。6月の「鶴見川多目的遊水地開所式」には、子どもたちの代表が「鶴見川源流の水」を持って「水の儀」に参加しました。川に関わる人々とつながって学ぶ中で、地域と学校とのつながりも深くなってきたのです。

総合学習、社会科、国語それぞれ独立した単元で学習しているのですが、子どもはそれぞれの学習をつなげて、川、源流、水源林、浄水、下水、治水などを理解していきます。しかも、単にしくみを理解するだけでなく絶滅危惧種、外来魚、源流域の開発、ゴミや下水処理、水質問題など今日的な課題を能動的に考えようとするようになります。ここ数年間の地域の人々の努力によってもたらされた川環境の回復傾向が子どもたちを励ましています。教科と総合学習が、地域を舞台にした学習でつながって、子どもを主体的な学習者に変えていると言えるのではないのでしょうか。

「田んぼづくり」と「社会科の授業」

今年は冷夏のため、子どもたちの田んぼはその影響を強く受けました。「稲の葉に茶色の

点がついていた。病気かな(7・27 田んぼ日誌)」「いもち病らしい(8・2 田んぼ日誌)」と田んぼ当番の日誌に子どもたちの心配な記録が続いていました。消毒をしてもらいましたが、もち米を植えた上野学級の田んぼは、根のしっかりした草が生えているという感じになっていました。子どもたちの関心は、「病気、収穫量」に向きました。子どもたちは「他の田んぼでは病気が出ているのか」「なぜ田んぼには生き物が集まるのか」などのグループ研究課題をつくって新聞にまとめました。

秋になると「米の値段の高騰」「米泥棒」「冷害」などの記事が新聞をにぎわしました。黒川(川崎市、学校から車で10分くらいの位置にある)で田んぼを借りて米作りをしている5年生は米のニュースに敏感になりました。5年生(和田学級)社会科の授業研究では、米泥棒の新聞記事から農家の経済や暮らしを考えました。「滋賀県の近江八幡市牧町では、約1800㎡の田んぼのうち、中央部だけを箱型に残して約1000㎡の稲がコンバインで刈り取られた。調べでは、刈り取られた稲はヒノヒカリで840キロ(22万4千円)だと見られる。」の記事を使って、ここに登場する数量を感じとることにしました。

「田んぼ」は社会科、理科、家庭科、さらに環境学習等に、かかわりがかなりあります。「主食であること」「人手と道具が関わる」「社会問題として取り上げられる事項が出ている」「土地の自然条件、雨・緑・気候・水」「稲作文化」「精神文化」「日本と東南アジア地域を考える際に、重要な教材」など広く深い学習対象です。5年生では、その全てを取り組んではいませんが、「田んぼの米作り体験」と「社会科の農業学習」は「実感のある学び」をつくる上で深い関係にあります。

「自分とつながる、ありふれたようにみえる事実や経験」が、実は「複雑な社会関係と法則の具現化」であるという見方・考え方

岡本先生は、『私たちの生きている時代(6年生社会科)』のレポートに、「自分につながる歴史が、子どもが歴史を学ぶ動機」として非常に重要であることを書きました。子どもは、自分や自分につながる仲間の学習に真剣に立ち向かいます。5年生3学期の『思春期の生き方を考える性の学習』の「受け継がれる命としての性」の授業の時、子どもたちのおじいちゃんおばあちゃんの話が出ました。身内に、阪神大震災で命を無くしたおじいちゃんやおばあちゃんがいる子が2人いました。その発表のとき、子どもたちの学習に向かう真剣さには格段の差がありました。それと似たことが、岡本先生自身の実感にもありました。岡本先生自身の戦前戦後の歴史学習への動機は、おばあちゃんに語ってもらった関東大震災や戦後の暮らしの話だったといいます。寝る前に必ず風呂に水を張ってから寝るおばあちゃんの姿は、今でも先生自身の脳裏に焼きついています。「時代を経れば経るほど、遠い過去になっていく『歴史』をどう自分に引き寄せて学べるか、学ばせたいことは何かと思うとき、自分とのつながりのある人の話や言葉というものは大きな意味をもっている。」と書いています。

「私たちの生きている時代」など、和光の歴史教育(社会科)が求めている「学習の内容と質」は、ある体系付けられた知識概念を演繹的に学ばせることではなく、「ありふれたように見える事物の観察とその経験から出発し、ありふれたと見えることが、その次元にとどまらない、複雑な社会関係とその法則の具現化である」という見方へと、一段一段近づけていくことを特徴としています。このような探求のプロセスは、社会科本来の知的迫り方であるし、同時に総合的な迫りでもあります。これは、「学校のまわりの学習」や「地域

の移り変わりの学習」という地域学習でも一貫しています。教科教育と総合学習の関係を考える上で、重要な視点であると考えています。

#### 芸術的教科と総合学習がつながり、相互の質を高める

和光鶴川小学校の音楽の授業では沖縄の歌をたくさん歌っています。総合学習「沖縄」に取り組んでいるから、「沖縄の歌」なのでしょう。音楽科の先生は、総合学習をやる学年だからといって6年生になって急に押し付けても子どものものにならないことを報告しています。音楽の授業を作る視点を大切にして、教材を選び、低学年でも歌うようになってから、わらべ歌などの古くからある沖縄の音楽が子どもたちに無理なく入るようになったそうです。6年間のカリキュラムのつながりが大切です。

また、上級学年のすてきな姿を見て学ぶことが、次に続く子どもたちの意欲を高めます。鶴小の子どもたちが歌う沖縄の音楽に、子どもの内側から湧き出てくるものを感じさせるようになったのは、子どもたちが自分たちでサンシン演奏の歌をCDに吹き込んで、あきまつりの商品として売り出した第3回目沖縄学習のころからだったといえます。

ところで、子どもたちが歌う沖縄の音楽が、内側から湧き出るものを感じさせるようになった時期は、子どもたちの総合学習「沖縄」自体が能動的に展開されるようになった時期と重なっています。総合学習「沖縄」で料理・エイサーの踊り・焼き物など、多様で豊かな活動が展開されるようになってきた歴史と重なっているのです。もちろん、第1回目、第2回目子どもたちの学習も真剣だったことは変わらないのですが、総合学習「沖縄」の学習展開を「五感を生かして、沖縄の魅力をたっぷり学習体験する中で、沖縄への興味関心を高め、沖縄にある今日の問題を、少しでも沖縄の側から考えられる」学習へと高め、積み重ねてきた歴史があるのです。

「沖縄文化の広がり」と「沖縄学習の深まり」は子どもの中でつながります。総合学習「沖縄」を1年間学んできた子どもは「歌の会」で『さとうきび畑』の歌の深い意味をとらえて歌いました。分科会レポートを参照してください。

美術科では「シーサー」を焼き、工作技術では「沖縄の玩具」を作ります。これらの活動も、音楽科と同じように、総合学習と還流しながら、表現の質を高めています。

#### 科学的読み物と「学びのつながり広がり」…分析と総合は科学の方法

「にわさきのむし」(1年)、「たんぽぽ」(2年)、「いわしのたび」(3年)、「川は生きている」(4年)、「木曾谷のネズミ騒動」(5年)、「野尻湖の象」(6年)が、それぞれの学年の「科学的読み物」の教材です。科学的読み物をどう読んだらよいのかを検討してきました。

「にわさきのむし」は、ダンゴムシ、ゴミムシ、オサムシ、カタツムリ、ヤスデ、ハサミムシなど身近な庭先にいるけれど、あまり好まれないムシを取り上げています。この本は、そんなムシに子どもたちの興味や関心をひきつけます。今年の2年生は、昨年、ハサミムシのメスを探すことに夢中になりました。捕ってきた虫を調べる図鑑的な読み方もできます。また、見開き2ページをみると、どこで生活しているか、どんなえさをどのように食べているか、卵の産み育て方の記述は共通しています。えさを食べ、成長し、繁殖する「生き物」を学ぶ教材としても意義があります。文字だけでなく絵から読み取れることもたくさんあります。本の巻末には、「飼って見ましょう」と飼育の仕方が紹介されているところをみると、著者は、子どもたちに、こういうムシに直接関わる飼育体験をしてほ

しいようです。1年生は、雑木林に「ペットボトルの仕掛け」を配置して実際にムシを取る活動から入りました。そして、「クイズ大会」形式で読み取りを進めました。

「いわしのたび」は、植物プランクトン 動物プランクトン イワシ サバ・カツオ カジキ・マグロ 栄養 プランクトンという食物連鎖を描いた絵本です。この読み物は、子どもたちの心に強く残る本です。4年生になって「川の学習」で外来種の問題や絶滅危惧種のことが学習対象になるとき、「イワしのたびとおなじだ」と子どもたちは発言します。その言葉で、食物連鎖の世界が共有されるようです。この読み物は、これまで子どもたちが無意識に体験してきた生きものに関わるバラバラな知を「食物連鎖」という環の中に総合してくれる作品です。その後の小学校での学習に生きているのです。

昨年、共同研究をお願いしている三石先生は、「科学の科は分けてわかっていく世界だが、読み物の世界は総合してくれる世界」というコメントをしてくれました。絵本の読んでも関心が強まり体験する子、体験による興味が絵本に向かわせる子、相互に混じって進んでいる子など、それぞれの子とも作品に即した多様な読み方があるのでしょうか、いずれにしても、子どもの「ものの見方」を育てる上で科学的読み物の果たす役割は大きいものです。

#### (5)「つながる知」を内包しているテーマは総合的

..和光の総合学習は「学際的」で「総合的」な課題をテーマにする

学習の対象の質そのものが「学びのつながりと広がり」を内包しています。「人の歴史と体」は理科の授業として取り組まれています。「人の体」・「性」・「いのち」などは、それぞれが総合的な学習対象としての側面を強く持っています。

「人の体」は人類史の直系に位置付けてとらえさせた...実践者のねらい

第1分科会の「人の歴史と体」では、「人の体」を「自分につながる先祖をはるか昔にさかのぼる」という人類史の直系に位置付けてとらえさせることをねらいました。「人の歴史」となると、いろんな角度から迫ることができます。『猿が人になるにあたっての労働の役割』もあれば、イリーンの『人間の歴史』もあります。また、生き物としての「ヒト」を考える人もあるでしょう。

子どもたちもまた同じです。「人の体」について学びたいことは何かと問うと、「どうして人間だけが知能が発達したのか」「いつから言葉が話せるようになったのか」「どうして障害者がいるのか」「人間の寿命は延ばせるのか」などの「疑問」が出されます。非常に多様です。

動物も植物も、生物の特徴は、「栄養をとって成長すること」と「子孫を残す」ことにあります。ザリガニ、ウシガエル、秋の虫、蚕などの具体的に生き物と触れる豊富な実体験が、生物の二つの特徴を、実感をもって理解していける力につながります。鶴小理科の「動物の体」の学習は、「動物の捕食と体」(5年)、「動物の繁殖」(5年)、「人の歴史と体」となっています。三つの単元を一貫しているのは、生物の二つの特徴を基礎的な概念として形成することです。教科書では、「人間と動物の体の働き」の中で「動物の呼吸、消化、循環」を扱っていますが、それは、部分的な機能を教えるのみで、生物の体の基本的な概念(体観)を伝えようとはしていません。「バラバラな知」では、本当に「動物の体・人の体」の理解にはいたらないのではないのでしょうか。

「人の体」の学習で何をこそ大切にしなければならぬかぜひ分科会で深めていただきたいと願っています。

「性を学ぶ」…小学生の重点は「うけつがれるいのち」

5年生の総合学習「思春期の生き方を考える性の学習」では“うけつがれるいのち（人のつながりと種の保存としての性）”という視点を大切にしています。今、「性を学ぶ」ということはうけつがれるいのちとしての性、心地よい人との関わり・快樂・コミュニケーションとしての性、暴力としての性、と三つの側面があり、人間生活をおくる上で最も本質的なところはだといわれています。しかし、体の変化や心の変化に関心を深め、異性への関心が高まり始める思春期前期の小学生にとって重要な課題は、ではないかと考えます。

思春期は、子孫を残す機能が人間の体に熟する時期です。その時の、人間の体と心の変化、子孫を残す仕組みの成熟、人間の誕生の仕組み、こうした人生飛躍の時期の生き方を考えることが大切なのではないのでしょうか。

5年生の学級では、「いのちのバトン」の授業で、世代のつながりを考えました。10代前までさかのぼると1024人の人のバトンを受け継いだ自分になります。学級の中に、おばあちゃんが阪神大震災でなくなった子がいました。それをきっかけに、自分につながるおじいちゃんおばあちゃんの学習が展開されました。

「生と死」を学ぶことは「生きること」を考えること

「いのちの学習」では、トピック的な学習としてとりくむことにしています。「ホスピスを通して学ぶいのちをみつめる授業」に取り組んでいます。また、総合学習「沖縄」で「命どう宝」を深く考えることの意義も大きいものがあります。

「いのち」にかかわって、現代的な問題は何かでしょうか。なぜ、自分はこの世に存在するのか、自分の命がなくなることは全てが終わるということなのか、そもそも動物や自然のも含めて万物はどこからきてどこに向かうのか、などあげればきりがなく「いのち」は不思議に満ちています。それなのに、テレビや新聞を見ると、生殖医療やクローンや臓器移植、医療ミスなど、不思議に満ちている「いのち」さえ操作の対象になっています。操作されない「いのち」とは何かを考えることがいま問われているのではないのでしょうか。小学生の直接の学習対象にならないかも知れませんが、しかし、先ほど紹介したように、子どもは「人間の寿命は延ばせるのか」とアンケートに答えています。

#### (6)教科教育の年間計画の中に、つながりのある単元を

工作技術科では、「物をつくる活動を通して、人間の技術・労働」を教えることをねらっています。何をつくるのかというと、衣・食・住の生活全般です。技術や道具の系統から単元を配置するのではなく、まず「作る楽しさを育てる」ことを重視し、作る過程で技術や道具の指導を丁寧に行うことにしています。

「つくる」「使う・遊ぶ・食べる」とものづくりを生かすカリキュラムに特徴があります。例えば「ゴーヤを植える 収穫 チャンプルー料理を作る 食べる」「土から粘土を取り出す 泥団子とつくる・器をつくる 野焼きをする」「綿花を育てる 綿をとる 糸を紡ぐ 編む 使う」など「学びがつながり広がるカリキュラム」だといえます。他の教科でも挑戦してみたいカリキュラムづくりではないのでしょうか。

### (7) 人と出会い、つながり学ぶ

地域のすてきな人との出会いで学ぶことを通して、子どもたちは教室の中では学びきれない学習をしています。3年生の谷戸の学習では「小野路の田極さん」、4年生の川の学習では「TR ネットの岸さん」「真光寺川を良く知っている地元の酒井さん」、5年生の乳製品の研究では「黒川の市川さん」、6年生の沖縄学習では「元アメリカ兵のアレンさん」「沖縄の証言者」「和光の元親和会員で被爆者の方」などそれぞれの学年に多数います。

2003年は、神戸の「12歳少年による幼児殺害事件」があつてから、「12歳問題」が焦点になりました。「12歳の危機」が語られたり、商業主義的に扱われたりしています。しかし、12歳は、「12歳なりのすてきな学び」をします。総合学習「沖縄」は、「12歳の学び」を考える教訓に満ちています。

「小学生に何がわかる」という声もありますが、子どもたちの学び自体が、こうした疑義の声を覆しています。子どもたちは、小学生だからこそできる学びを展開しています。

岡本学級では、人との出会いの学習のたびに「心に残った一言」を書き綴ってきました。「丸木政臣学園長」「ベトナム帰還兵ネルソンさん」「『集団自決』体験を語る金城重明さん」「元ひめゆり学徒隊宮良ルリさん」「元ずいせん隊宮城巳知子さん」などです。

子どもたちは証言者の言葉から、何を切り取っているのでしょうか。

金城重明さんの言葉からは、「生き残ることが恐かった」「私はお母さんを殺してしまった」「小川の血は永遠に消えない」「『集団自決』は日本軍の圧力」「米兵に殺されるくらいなら自分で殺した方がまし」「人間が人間でなくなる」...などです。

宮良ルリさんの言葉からは、「人間が人間でなくなる」「命どう宝」「この兵隊さん二度死ぬんだね」「戦場のあいさつは『生きていた!』だった」「いま、あなたたちが受けている教育が真実です」「『命どう宝』は自分たちでつくっていかねばならない」「次の世代の人たちに『命どう宝』を伝えてくださいね」...などです。

子どもたちは、概念先行ではなく、ガマの実体験学習（追体験）や証言者・ガイドなど人との出会いを通して、彼らの感覚感性をフル動員して学びます。そこで得た感覚感情も含めた知性は、子どもにとって生きた知性となります。「沖縄学習で子どもたちがシャントする」といわれるのは、こうした学びの反映だと考えられます。しかも、「小学生なりの学び」は、大人の感性にも働きかけ、「他者を動かす力」になります。単に知識を受身的に暗記する学習から、「自分が見える」「自分と他者の関係が見える」「世界と自分の関係が見える」学習となっているのです。

## 5、国家を上げて人を殺すことを正当化すること

...人間が人間でなくなる、それが戦争

12月の航空自衛隊に続き、1月に入って、陸上自衛隊にもイラク戦争への派兵命令がだされました。日本が、急速に『戦争をする国』へと変えられてきています。『戦争をする国』とは、『戦争のために人を殺すことを正当化する国』のことです。テレビニュースで自

衛隊員が「実際に目の前の人に銃を向け撃つことができるかどうか、と考えてしまう。」と語っていました。人間としての感情を持っていたら当然のことではないでしょうか。

「人を殺すことを正当化できる」人間を育てるのは、教育に頼るしかありません。現在着々と準備されている「教育基本法見直し法案」の国会上程の意図が、今まで以上にはっきり見えてきています。教育基本法見直しと連動して憲法9条を変える動きが強まっています。

国会の力関係では三分の二以上を改憲勢力が占めていますが、しかし、憲法を変えるには国民の過半数の指示を得なければなりません。ところで、その改訂の手続き方式を変える動きがあることも注意すべきです。

いまは、日本の国民の良心が問われていると言っても過言ではないと思います。「子どもの教育」と同時に「一人の市民としての意見表明」が求められています。ともに、時代の課題に正面から向き合っていきましょう。